

英語日記@長松小

2022. 5. 24

英語担当：

Hirai Shuji

Vol.6

～英語授業の記録などです～

新年度がスタートしてあっという間に5月末ですね。さっそくいろいろな教科がスタートしていて、英語も3・4は4～6時間ほど授業をしています。5・6年生は10～11時間目を終えたところです。第一時から始めた英会話の練習を毎時間行っています。小学校の英語では「話せる」を一つの目標にしています。どうしたら、「話せる」ようになるのかな？と私も書籍を漁ったり、先行実践を調べたり、幼児教育や脳科学の研究資料などを参考にいろいろ悩みながら学習を進めています。

どうれば英語を話せるようになる？

昔、テレビCMで「聞き流すだけで英語が話せるようになります！」と何度も何度も流されていて、それを聞いた当時の私はどうだったかという、そんなに流ちょうに話せるようにはならなかったように思います。自分が大学で外国の方と英語で話したり、教師になって英語を使うことになったりして、「なんとなく」使えるようになったのかな？という感覚なのですが、実際には英会話の練習ってどうすればいいのでしょうか？

今の授業で採用している考え方は「フィードバック誤差学習理論」というものです。頑張っただけ勉強していますが、私の頭で処理して、可能な限り簡単な言葉で書き替えましたが、まだまだ複雑ですね。もっとシンプルに伝えられるようにこれからがんばります。

「フィードバック誤差学習理論」

- ①リスニング能力は、耳から音や音声を聞くことで「脳内側頭葉ウェルニッケ野部位」で向上する。
- ②スピーキング能力は、口から音声を発することで「脳内側頭葉ブローカ野部位」で向上する。
- ③最初はリスニングもスピーキングも上手くない（誤差がある）。練習を重ねて脳内にいろんなデータが集まります。そこで学習し直され、「ウェルニッケ野」と「ブローカ野」の間でループ化（回路）が出来上がり、リスニングとスピーキングが結びつきます。
- ④つまり、リスニング力は耳で聞かないと成長しない。スピーキング力は口で言わないと成長しない。会話のやり取りは会話のやり取りをしないと会話ができるようにはならない。理由としてなんでも出力してみないと成功したのか、失敗したのかという結果のデータが脳内に集まらないからそうです。
- ⑤こうして数多くの間違いをし、問答やりとりを重ねるうちに、いつの間にか無意識的な会話力ができることを「非宣言的記憶」というそうです。

これを使って、どんな練習をしているかという、

- ①状況の設定（英語でそれをいう必要がある場面を設定する。）
 - ②会話の練習（リピートなどでインプットした後、会話型で何度も何度も繰り返し練習します。）
 - ③新しく獲得した英語表現を使った活動 or ゲーム（「楽しい」「使えた」という感覚の獲得を目指す。）
- など考えながら授業していますが、どうでしょう(;^ω^)